

(37) 集落の「共演空間」に関する研究
—北播磨のミニチュア巡礼地—

THE FUNCTION OF "COACTING SPACE" IN SETTLEMENT
- A CASE OF MINIATURE PILGRIMAGE PLACES IN NORTH HARIMA -

○ 近藤 隆二郎*・盛岡 通**

KONDO Ryujiro, MORIOKA Tohru

ABSTRACT; The aim of this paper is to clarify the function of "coacting space" we called as one kind of community space to vitalize regional activities where people perform together like a stage.

Miniature pilgrimage places patterned after Shikoku's 88 pilgrimage can be regarded as "coacting space" to perform "Shikoku Pilgrimage" on settlement. We researched eight miniature pilgrimage places of North Harima through the field survey for understanding the changing and state of social system of them as "coacting space". As a result we understood miniature pilgrimage had been the social system to produce two types of intercourse that vitalized closed community. One have been held between outsiders and inhabitants for the strangers has never eliminated as for he plays "pilgrimage". Another have been held between inhabitant each other, one group from village people willingly participate in the plays as "pilgrimage" and the other group act as receptionist ("settai") to serve tea and sweets to the pilgrimages.

KEYWORDS; Coacting space, Social system, Miniature Pilgrimage Places, Human Performance

1. はじめに

1.1 研究の背景

市民主体のまちづくりや環境づくりには、市民が環境に対して抱く環境観を共有することと同時に多くの人々のかかわりの中で環境観を自分達の手で再創造していくことが内発的な発展には必要である。地域とは「場所・共通の紐帯・相互作用」の3要素からなり¹⁾、定住性としての「場所」及び価値といった「共通の紐帯」が希薄である現代では、とくに地域間交流や地域イベントといった「相互作用」がその紐帯を産み出すものとして着目されている。その理由として3点挙げる。

①交流による新しい関係形成プロセスは、既成の枠組みや際を越えることでインターフェイスとして地域活力の再生に有効である。

②高度情報化社会のもとでは、自らオリジナルの情報を発信することが地域活性化やアイデンティティの形成には必須要素であり、交流によって異種要素が接触することによって世界にひとつしかない高付加価値の情報を生み出す契機を持ち得る。

③交流は必ずしも器としての舞台・空間を必要とするわけではなく、まち角でのパフォーマンスのように、ハード以前に何を交流するかというソフト化の路線に適応する。

つまり、コトづくり、ソフトウェア重視の地域政策の有効性の高まりの中で、交流という相互作用の重要性は増していると言えよう。

1.2 本研究の位置づけ

「交流」にも多彩な形態があるが、高度情報化社会においては多主体が顔を突き合わせるハイタッチ（感性志向型）コミュニケーションが重視される。本研究は、地域にそのような相互作用をもたらす仕掛けのひとつとして「共演」という概念を提示する。テキストとして集落の伝統的な「共演空間」であるミニチュア巡礼地

*大阪大学大学院環境工学専攻 Graduate Student, Department of Environmental Engineering, Osaka Univ.

**大阪大学工学部環境工学科 Department of Environmental Engineering, Osaka Univ.

の分析を通して、その相互作用の創造と変容を明らかにすることを目的とする。伝統的村落における交流空間の機能について考察するものであり、直接的に現代の暮らしに再現することは議論を要するが、ひとつの方向を示すことができるものと考ええる。

1.3 「共演」の概念

著者は、環境観を共有化する具体的手法として「ことおこし」を提起した²⁾。「ことおこし」におけるコンセプトの純化と展開という断面の中で、「演じる」という行為（登場）がまちへの意味共有化を促すとした。この人と環境との関係に、主体間の相互干渉も取り込んだ概念として「共演」を提起する。「共演」とは共に演じることであり、演技者となった主体同士が「演技」を通じて相互干渉することより新しい関係性が創造される動的な概念である（図1）。演劇用語を用いると「共演」に必要な要素として、①シナリオ②主体（役者）③演技（複数）④しつらい（舞台）の4点を挙げることができる。共演においては4要素がそろうことが重要ではあるが、認識の深さへの影響という点から考えると、観客になりがちな主体を参加者へと促す身体体験を伴う「③演技」が最も重要な鍵であると言える。例えば、芸能空間とされる「茶の湯」は共演空間としても捉えることができる。茶室では様々な演技（ふるまい）が要求され、その演技の相互干渉によって茶の湯は成立する。茶室だけではその空間は理解できない。

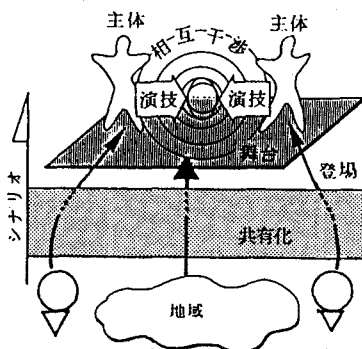


図1 「共演」の概念

都市における共演の位置づけは別稿の予定であるが、現在の共演空間は内部組織的な祭礼やテーマパークの経済的サービスや「対戦」が組み込まれたスポーツに頻繁にみられる。「地方自治や地域経営の分野において住民の社会生活の設計や生活空間づくりの中に演劇的なアプローチや演出的な契機強化という視点が織り込まれるようになってきている」³⁾中で、共演は、自分のまを舞台とし来訪者をもてなすという、生活空間と舞台というふたつの意味が重複する体験を住民が共有することで、地域への認知構造を刺激する契機を含んでいる。「共演」空間とは市民自らが舞台の演じ手となって、同じく演じる人である来訪者との交流を持ち、その舞台上の交流の中で情報が交わされる場と言える。この情報交流が停滞している場合には「マンネリ」とされ、活発な場合には「活性化」と判別される。

2. 「共演」とミニチュア巡礼地

2.1 ミニチュア巡礼地について

ミニチュア巡礼地（以下ミニ巡礼地と略）は、江戸期を中心に遠方まで行くことができない老人婦女のために、四国八十八ヶ所（以下本四国と略）等の巡礼を模して寺社の裏山等につくられた石仏を配した小規模の巡礼地である。筆者は別項でその巡拝者の空間体験構造を「巡りという象徴的な身体行為によって（本四国を）想起する連想的体験」⁴⁾としたが、同時にその体験を演出する仕掛けとして「接待」という四国巡礼の民俗⁵⁾を模した村人の参加システムを確認した。毎月21日（オダイシサンの日）に「巡礼者」と「接待者」という二つの上演が相互干渉する共演空間の形成として捉えることができる。共演の要素としては、①シナリオは「四国八十八ヶ所」、②主体は村人あるいは信者、③演技は「巡拝」と「接待」、④しつらいは寺院境内等の巡礼道と分節化した。つまりミニ巡礼地は、「四国八十八ヶ所」を村の中で月に一回共演している舞台であると考えられる（図2）。

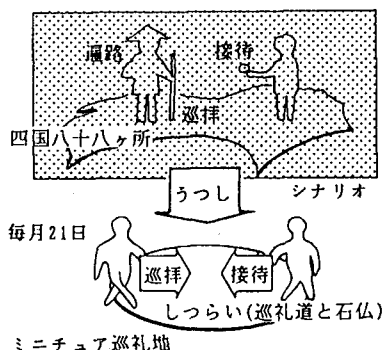


図2 ミニチュア巡礼地の成立

2.2 共演空間としてのミニチュア巡礼地

ミニ巡礼地に想定できる、演技を中心とした共演の要素の関係についてまとめる。

①演技とシナリオ：四国への交通が発達し、かつ巡拝自体も容易化（タクシー巡拝等）に向かう現代においては、ミニ巡礼地の役割は終わりを告げているはずである。しかし、巡拝や接待という民俗（演技）が現存することは、そこにシナリオとしての本四国が変容され新しい現代的意味（価値）を生成している可能性がある。

②演技と主体：接待は巡拝者を平等視し、差別はしない。つまり、村内の接待者と外からの巡拝者との相互作用を生みやすい。

③演技と演技：遍路に金品を喜捨して善根をつもうとする本四国の接待と巡拝者との関係は、ミニ巡礼地においては巡拝者に顔なじみも多いことからむしろ交流的要素が強いと思われる。

④演技としつらい：しつらいは石仏を林道に配列しただけのミニ空間であるが、各石仏に施主が刻まれている（金石文）ことから、舞台作成に多数の協力者の存在を推測できる。また、その維持管理者としては寺および演技者が関連すると思われる。

3. ミニチュア巡礼地の調査

3.1 調査方法

上述の仮説のもとに、ミニ巡礼地と集落との関係の史的変化を追うことで共演空間としての生成と経過の考察を試みた。ミニ巡礼地の分布資料等は未整備であり、その全国的傾向を把握することはできないため、調査対象地として兵庫

県北播磨地方（西脇市・加東郡滝野町・加東郡社町・小野市）を設定し、8つのミニ巡礼地を研究対象とした。ミニ巡礼地は概して史的資料に乏しく、本調査では表1の方法を用いて、開設時と現状調査を中心にその全体像の把握を試みた。各巡礼地の調査概要を表2にまとめた⁶⁾。

表1 調査方法の概略

調査名	目的	方法・手段
①施主調査	施主の村・人数より開設時の状況把握	金石文調査・施主名簿
②参与観察	現状の民俗を把握検証	実地観察
③聞き取り調査	現状でのシステムや昔の様子の把握	個別ヒアリング
④巡拝者把握調査	現在の巡拝者について定量的把握	巡拝者へのカード調査 [*]

※各調査の具体的データ源は表2中に各事例ごとにまとめた。
*年齢・性別・居住地・巡拝歴・巡拝動機・寺との関係について選択式で記入

表2 対象としたミニチュア巡礼地の概要

中心寺院	長明寺	浄土寺	常光寺	善音院	西林寺	光明寺 ^{*1}	萬勝寺	実相寺
所在地	西脇市高松町	小野市浄谷町	小野市下住町	加東郡社町	西脇市坂本	滝野町光明寺	小野市万勝寺町	西脇市西脇
成立時期	文政7(1824)年	文政9(1826)年	安政5(1858)年	明治34(1901)年	明治42(1909)年	大正2(1913)年	大正5(1916)年	昭和16(1941)年
巡拝時間	約40分	約25分	約15分	約15分	約15分	約25分	約12分	約10分
施主調査	金石文調査	金石文調査	施主名簿 ^{*2}	施主名簿 ^{*2}	施主名簿 ^{*2}	金石文調査	金石文調査	金石文調査
総本・心外 札所・番外	107(88+19)ヶ所	105(88+17)ヶ所	101(88+13)ヶ所	101(88+13)ヶ所	97(88+9)ヶ所	97(88+9)ヶ所	96(88+8)ヶ所	100(86+14)ヶ所
施主判明数	84(23不明)	85(20不明)	94(7不明)	95(6不明)	94(3不明)	90(7不明)	94(2不明)	70(30不明)
個人施主数	176名	163名	173名	248名	130名	215名	187名	114名
組織施主数 ^{*3}	4(地2+信2)	34(地31+信3)	16(地16)	9(地3+信5+他1)	3(信2+他1)	2(信2)	8(地6+信1+他1)	0
巡拝者調査 ^{*4}	930121実施	930121実施	921221実施	921221実施	921221実施	921221実施	921221実施	921221実施
巡拝者数 (女・男・不明)	42人(F38+M3+1)	33人(F32+M1)	61人(F52+M8+1)	41人(F38+M2+1)	17人(F16+M1)	1人(M1)	4人(F3+M1)	7人(F4+M3)
ヒアリング先一覧 (～93.1.23)	前住職(宝光院) 檀家世話人会長 巡拝者・1名 心持講副会長	住職(歡喜院) 住職(宝持院) 巡拝管理人2名	堂守(世話人) 播州弘真会教名 接待者・数名 住職(常楽寺)	住職 接待者・数名 巡拝者・数名	住職 接待者・数名 巡拝者・2名 大師講・1名 後教婦人会1名	住職(大慈院) 住職子息 檀家総代	住職婦人 大師講・3名	住職婦人 巡拝者・数名

*1 光明寺の設立年は前稿論文(註4)作成以後の調査で判明した。

*2 西林寺…「八十八箇所寄附名簿(年代不明)」、善音院…名称なし(年代不明)、常光寺…「室生山八十八ヶ所建立施主姓名簿(明治廿二年再写)」

*3 組織施主の内訳を(地縁的組織数+信仰的組織数+その他)として示した。

*4 921221に同時調査を実施したが、長明寺では記入ミスのため、浄土寺では1221は「他人の願をもらう」という言い伝えがあり極端に少数であったために再調査した。1/21は「ハツダシ」であったが、大きなデータの差はないとした。

3.2 8巡礼地全体の傾向

1)開設時の状況

施主調査からは開設時の住民の協力状況を伺うことができる⁷⁾。個人が複数の札所の施主になることはなく、

必ず百人以上の個人 施主の協力があつた。施主がミニ巡礼地を持つ寺院の檀家地域に限定されずに信者や地元名士といった広がりを持つと同時に、個人という形態と「村中」「講中」といった地縁的組織、信仰的組織の形態とが存在した（表3）。地縁的組織の方が比較的多いが、開設年代順にみ

表3 施主形態の分類

個人	個人（家族・親戚も含む）		
	地縁的組織	「村中」「家内中」「檀家中」など	
	信仰的組織	「講中」「同行中」など	
その他	「十方施主」など		

ると浄土寺に34もの関与があつた組織的な施主は徐々に減少し、遠方の個人施主が見られるようになる。近隣の施主の広がりも檀家地域にほぼ合致するようになり、村落共同体の独立傾向を示している（図3）。

つまり、ミニ巡礼地は寺の檀家という既成宗教の枠や村という共同体の枠をも取り払って成立していたことがわかる。徐々に檀家地域と合致していくことは、寺の装置となつていったことを示す。施主圏と巡拝圏が重なるとすると、共演の主体としての巡拝者は当初より外部を含んでいた、開かれていたとも言える。また、組織施主の存在は集団的な巡拝状況を示している。

2) 巡拝者の現状

巡拝者は女性高齢者（オバアサン）中心であり、巡礼の開始時期は様々であるが、その動機は「②自発的に」が最も多く、「③友人に誘われて」「①家族・親戚に誘われて」が続いている。巡礼地（寺）との関係では「①檀家」主流であるが、長明寺・常光寺・善龍院のように「④近所の住民」をはじめとする多様な参加者を見ることができる（図4）。巡拝地域は施主範囲に比べて狭いが、同じように檀家以外の主体にも開放されている。暮らしに余裕ができた主婦が、自分の檀那寺にある「オダイシサン」に近所の人を誘う情景が伺える。

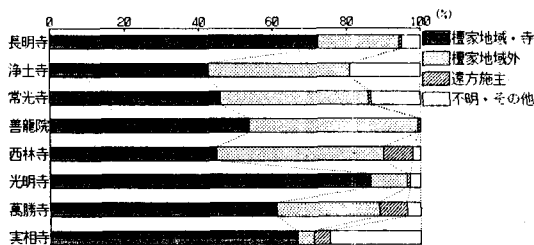


図3 個人施主の地域別割合

※便宜上、地域として次のような区分を設けた。「檀家地域外」…檀家地域を含む市域に隣接する市域。「遠方施主」…檀家地域を含む市域に接しない地域。

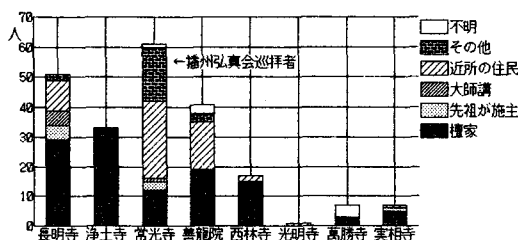


図4 現状巡拝者の巡礼地(寺)との関係

※複数回答含む

4. 調査事例からみた共演空間の特徴

本研究は共演空間としての解釈を主目的とするために、各巡礼地別の詳細な考察は省略している。

4.1 演技とシナリオ…柔軟性

本四国への媒介に過ぎなかったミニ巡礼地は、開設時には忠実な模倣空間であり続けようとしたことが、札所間の相対距離や環境までも本四国に似せようとした開祖伝説から推測できる⁸⁾。また、ご利益に代表される各札所が持つ意味については、長明寺の19、88番札所、西林寺の生木地藏、善龍院の鱈大師等にご利益があるという言い伝えを確認したが、これらは本四国でもご利益がある有名な札所であり、模写されたものにもその意味が付与されて息づいているとも考えることができる。しかし、本四国のものとは異なる独自の価値が創造される現象をとらえることもできる（表4）。これは浄土寺に顕著であり、寺の本尊（薬師如来）に関連したのか受験や健康といった「願を掛けに行く」大師となっている。「夜中（ウシミツドキ）にひとり参る」「自分の年齢の札所番号までまいる」といった独特の巡拝方法が見られる。他の札所ではこのような特殊な参拝方法を持つことは確認していない。また、常光寺でも「このお大師さんはよく効く」といった民間信仰的な

表4 長明寺・浄土寺・常光寺における言い伝えの概要

長明寺	浄土寺	常光寺
■この霊場の赤松を伐って持ち帰ると死ぬという¹⁾ ■19番立江地蔵のご利益・子育て ■88番大窪寺のご利益 ■大窪寺番外3体地蔵のご利益・縁結び	■毎日丑3ときに願掛けで参っていると、ある夜山全体が金色に光り、お坊さんがひとり歩いて来てでき物の治し方を教えられ、それを実行すると治った。 ■19番立江地蔵はご利益があることで有名。腰を掛けて拜めるように御堂も設置。 ■12月21日は「オオツゴモリダシ」であり、他人のかけた願をもらうために参らない方がいい。 ■受験や健康といった願の掛け方として、オネガイゴトを記した小紙片を全札所に供えていく方法がある。 ■各札所の賽銭箱やよだれかけは、各人がネガイゴト	■60番番外の龍神像のご利益。一願祈願のお願いを聞く。小豆島に勧誘された。八十八ヶ所設置より古い。 ■37番の六地藏はよく願いがかなう。 ■職人の神様である千手観音や病気に効く薬師如来が札所本尊として多い³⁾。病氣時にはよくまいった。

*1/中辻康司(1953):播磨西脇市高松山の八十八ヶ所霊場と大師講、仏教民俗2, pp103-104より

*2/甲南大学文化民俗研究会(1987):甲南民俗研究第23巻-東播の民俗小野市を訪ねて-, PP72-73より

(※1・2以外筆者調査)

*3/実際には、本尊は本四国とほとんど等しい。

価値が強調され「霊験あらたかな」石像が逆に小豆島八十八ヶ所に身分が写された事実も確認でき、長明寺では88番番外の3体地蔵が縁結びに効くとされていた。善龍院では「お砂踏み」⁹⁾を実施するとともに本四国ツアーを主催しており、本四国というシナリオの強調としてもとらえることができる¹⁰⁾。

以上より、ミニ巡礼地は必ずしも本四国という原シナリオを固持するのではなく、それをベースとしながらも付加要素を受け入れて変更していく柔軟性を持ち得ていたと言えよう¹¹⁾。おそらくは、むしろ付加要素として独自の意味を生成して個性を確立することが、より多くの信者を集める誘引となったのであろう。その変更と共演の関連は不明だが、新しい意味を広め増幅したのは共演による相互作用であると考えられる。

4.2 演技と主体…循環性と開放性

1) 接待のシステム

月ごとに担当が替わる接待の輪番システムは、常光寺と西林寺で確認できる。常光寺では「お祭り番」と呼び、檀家地域(来住・下住町)を12地区に分割して年に1回接待の当番となるシステムである(図5に配置図を示す)。当番地区の婦人会有志は、21日早朝から接待の準備と共に石仏全部に前夜から用意したお供えものを配し、巡拝者にお茶の接待をした後、昼前頃に賽銭等を回収して解散する(図6)。西林寺には、檀家地域8村ごとに婦人高齢者対象の大師講があり、「お茶炊き当番」として順番にお茶の接待役をしているが、巡拝者の減少と共にお茶堂で雑談する方が主となっている。長明寺では檀家地域各地区の代表である「世話人」十数名が集まり、接待や巡礼道の手入れ、賽銭等の管理を行うが、全員男性であるとともに固定したメンバーであり交流は少ない。善龍院では寺依頼のお手伝いさんが接待を行う。

2) 外部の受容/施主・巡拝者

寺の装置でもあるミニ巡礼地の設立に対して檀家以外の協力を得ていたことは、村落共同体の中でミニ巡礼地は設立時より外部との交流の接点にあったとも言える(図3, 図7)。巡拝者を区別する事例はないが、とくに外部との交流が盛んなのは常光寺である(図8)。小豆島八十八ヶ所巡拝が中心的活動である「播州弘真会」が数十人、全員白装束でご詠歌をあげながら巡拝する。ムラ社会は基本的に閉鎖的であり、異人來訪によって活性化するという象徴論的な解釈をふまれば、ミニ巡礼地には共演による「巡礼者」という枠(役割)が設定され、その枠内ならば誰でも受け入れた内と外との「境界」であった¹²⁾。つまり共演では、演者同士の規約(役割)の成立が外との接触に伴う緊張を安定化し、動的というよりは静的な交流空間を形成し、情報交換といった面を中心に積極的な交流がみられた。

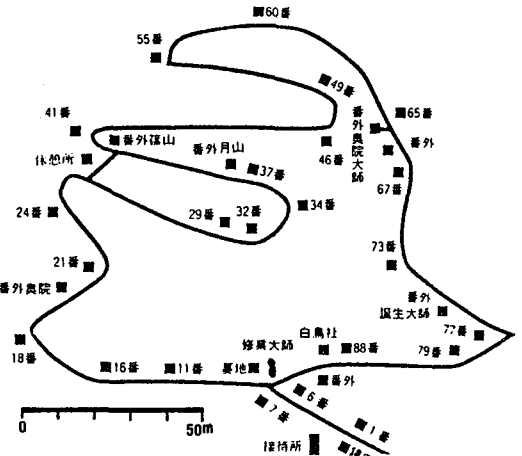


図5 常光寺八十八ヶ所の配置図

※蓬萊由雄(1992):来住郷の行事について(下),小野史談18号, p50掲載図に縮尺加筆

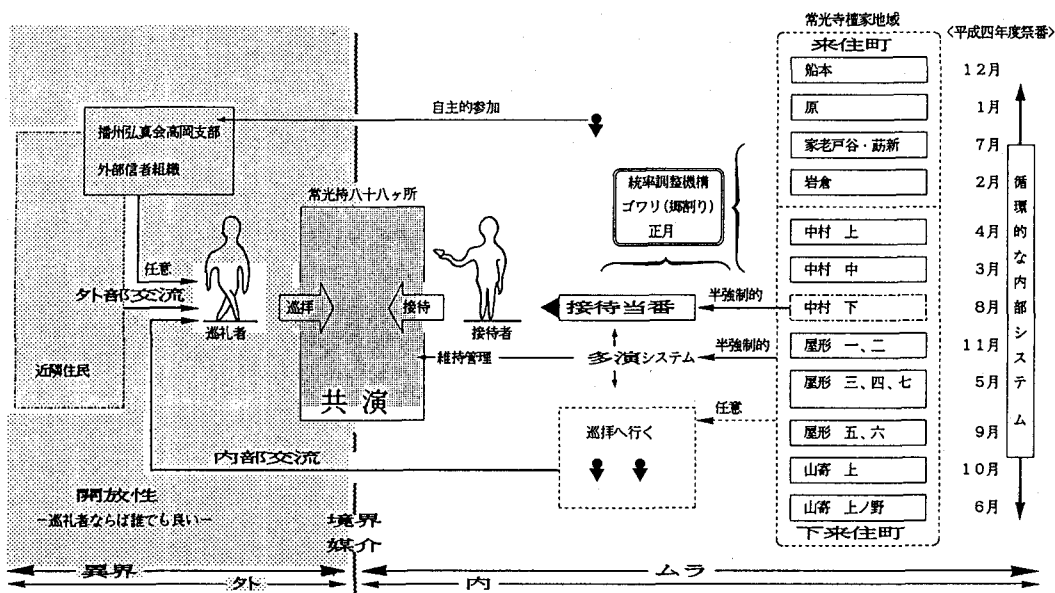


図6 常光寺にみる接待のシステムと共演の姿

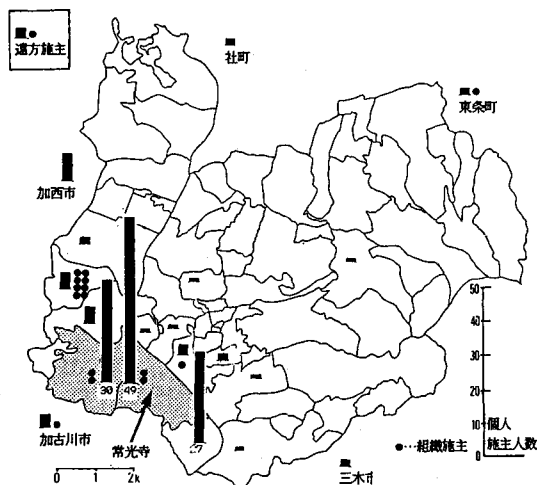


図7 常光寺の檀主の分布(小野市域)

※●…組織檀主数(1)を示す

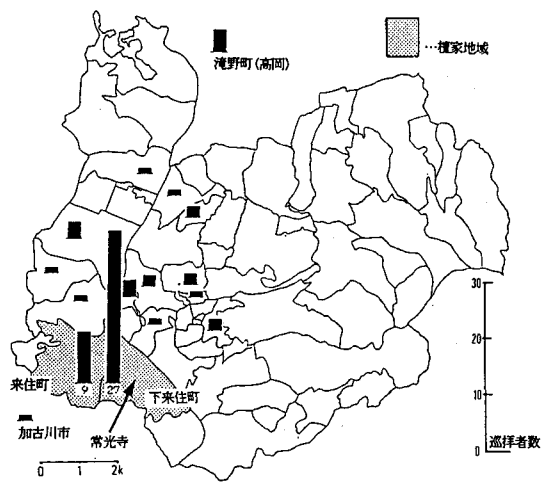


図8 常光寺における巡拝者の分布(小野市域)

※1992. 12. 21調査による

以上より、現在の衰退期にある巡礼地の状況等を考慮すると、相互干渉を期する共演にとって参加主体の固定化は停滞を招く主要因であることが考えられる。接待が循環的な内部システムであり、巡拝は外部に開かれたオープンなシステムで、内的相互作用と外的相互作用の両方を含む交流を持つ可能性がありながら、その交流が作用しないと停滞を招き、その存在すら忘れられる状況を招く。逆に言えば、ミニ巡礼地は参加者および交流があってその意味が共有される（存在する）空間であるとも言える。

4.3 演技と演技…多演性

巡拝が規則ではなく自主的な参加であることは、接待者である住民に巡礼地の価値を再認識させ、巡拝に導くという相互作用も常光寺では見られる。さらに、昔の西林寺でも見られた接待者が巡拝者、また掃除者と複

数の役割を演じる「多演システム」は、より知り合いの度合いを高め井戸端会議的な内部的交流を生むと同時に個人の体験を多様化して巡礼地への認識を深める。「わたしのオダイシサン」と言う愛着意識の芽生えを接待者が「よろしゅうおまいり」と巡拝者に声をかけることにも伺える。

4.4 演技としつらい…共同性と付加性

現在のしつらいの維持管理システムは以下のである。常光寺では、簡単な修理費用は檀家村の代表が集まる「ゴワリ（郷割り）」¹³⁾で決定されるが、大修理には「役員会」を設置して寄付を募り対応する。下住町老人会が毎月21日前に掃除をしているが、盆前には両来住町民で掃除する。戦前の浄土寺、善龍院、西林寺では、近隣住民が風呂炊き用に薪を取ることで手入れされていたが、現在は寺の管理となっている。浄土寺では簡単な掃除は巡拝者がしている。長明寺では、崩れかけている石仏の施主の子孫を探し出し再建費用の寄付を依頼し、拒否の場合には信仰深い人に頼むという接待者による再建システムが機能している。維持管理以外にも、しつらいへの巡拝者による付加行為を「番外」という増設の形で確認した¹⁴⁾。

戦前は近隣住民による必然的な維持管理だったが、長明寺や常光寺という寺機能が弱い巡礼地を中心に現在でも維持管理再建を含めたシステムが村の共同管理下にある。寺域にあるにもかかわらず付加（増設）も含めたしつらいへの能動的な行為は、共演という場が村のシステムとして維持されてきたと同時にひとりひとりがその意味や価値を認知していたためとも言える。常光寺と長明寺が村の盆踊り大会の会場でもあったことはその表れでもある。現在、寺が管理することは住民が受動的態度に変わりつつあることを示すとともに、何らかの組織的主体の介在が必要であることを示唆するものとも言える。

4.5 ミニチュア巡礼地と集落との関係

村落共同体を超えた多数の人々の協力で作られたミニ巡礼地は、村内で接待のシステムが循環的につくられると同時に外部に開かれた月に一度村落に出現する交流装置であった。本四国のうつしであった意味を柔軟的に変容し、時代に合わせた新たな価値を創造して根付いた巡礼地もあった（表4参照）。空間に付与した価値を共演という交流活動を通して任意に変更付加できたことが、時代を経ても継続している理由として言えよう。と同時に月一回の共演は村内の人々に外部及び内部との相互作用で村落共同体と巡礼地への価値を再認識することを促している。

このような共演が維持されてきた理由を次のようにまとめることができる。本四国をうつしたということより、①詳細な計画や規則が無く最低限と言えるほどの「巡拝」と「接待」という演技だけであり、結果的に柔軟性を生んだ。②同時に、本四国というシナリオ性が周知の事実であり、参加者によるテキストの読み込みが不要であった。③うつした空間という脆弱性が逆に地域に合わせて変容させる操作性を増した。

5. おわりに

「共演」とは、環境に対する価値や認識を共同体の中で確認するとともに、外部との演技を通じた交流によって新しい価値創造を通して「わたしたちのもの」にしていく仕掛けともいうことができる。このことは、価値を認めにくい環境であっても価値を創造できる可能性と同時に、設定した意味を時代に合わせて変化更新する柔軟性の重要性も示している。

テーマパークやリゾートあるいは観光地といった来訪者を前提とする地域整備において住民と来訪者との距離は非日常性の重視に比例して遠くなりつつある。しかし、非日常性を施設的に刷新するには非常なエネルギーを必要とし、もうひとつの方向として、これまでの環境消費型－閉鎖環境型から環境創造型－開放環境型へのシフトが求められている¹⁵⁾。国際演劇祭や映画祭といったイベントによる来訪者との交流が新しい文化の芽を地域に創出することはムラおこし等で実証、実践されているが、「共演空間」はこのようなホスト／ゲストの関係を地域へ開くひとつの方法としてとらえることができる。すなわち、「見る←→見られる」という関係において演技を固定して主体を循環させる共演のシステムは、観光地だけではなく、コミュニティ意識の希薄な現代都市においても新しい関係を構築する契機として有効であろう。例えば、まち(市域)全体を会場とす

る『ア・バ・ソ・リ・ト・フ・ア・神戸'93』では、住民と観光客との融合をもたらす環境観を再創造していく共演の萌芽を見ることができる。また、最初から場所固有の価値が小さくても（模倣であっても）、交流を活発にすることで新しく意味が創造され共有化されていくというプロセスの重要性を計画にも配慮すべきこととして指摘できる。

以下に本研究についてまとめる。

1. 市民自らが舞台の演じ手となり、同じく演じる人である来訪者との交流から新たな創造を生み出す場、地域に相互作用を生成する仕掛けのひとつとして「共演」を提起し、構成要素として①シナリオ②主体③演技④しつらいという4点を挙げた。
2. ミニチュア巡礼地を本四国を演じる集落における伝統的共演空間として捉え、その継続性を分析の対象とした結果、うつしによる単純化とテキスト性が柔軟性と創造性を生み出し、持続する共演空間をつくったと解釈できた。
3. 北播磨のミニ巡礼地の調査より、外部の巡拝者や施主を受容してきた開放性と内部の多演システムが、外部交流と内部交流といった相互作用を持ち、さらに接待の輪番システムにみる循環性が相互干渉性を高め、結果として新しい意味や付加要素が加わる柔軟性を生み出してきたことを示した。
4. ミニ巡礼地が単なる模倣空間ではなく、集落の共演空間として外部との接点に位置するとともに相互作用を引き起こす交流の役割を果たしている仕掛けであることを明示した。

今後の課題としては、共演の概念を現代の都市において交流のコンセプトとして広げることが必要である。また、歴史文化的には、巡礼地が村に与えた影響の把握や他のミニ(写し)巡礼地との比較、「物見遊山」といった遊楽行動と共演がどのような重なりを持つのかについて考察を深める必要がある。

最後に、調査過程で御協力を頂きました各巡礼地の関係者の方々に深く感謝いたします。また、本研究を進める上で貴重なご教授を頂きました田中智彦先生（大阪女子短期大学）田原直樹先生（姫路工業大学）に御礼申し上げます。

6. 註および参考文献

- 1) 鶴見和子・川田侃編(1989): 内発的發展論, 東京大学出版会, p53
- 2) 近藤隆二郎・盛岡通(1991): コンセプトの純化と展開からみた市民参加型のことおこしに関する研究 - 大阪上町台地/太陽・緑・水・環境システム研究 VOL19, pp189-195
- 3) 間島正秀(1988): 生活空間の「劇場」化と地域経営戦略, 自治研究64-1, pp30-55
- 4) 近藤隆二郎(1993): 北播磨におけるミニチュア巡礼地の空間体験構造に関する研究, 造園雑誌56(5), pp247-252
- 5) 巡礼者に対してお茶や果物、宿を提供する習俗。
- 6) 本文中のミニ巡礼地に関する記述は註無き場合は著者(近藤)の調査によるものである。
- 7) 「施主」とは、八十八ヶ所設立に際して、寄付をした造立主体の名称であり、個人銘と集団銘がある。島津俊之は寄付された扁額の施主銘の分析から社会集団を考察している(島津俊之(1990): 奈良東山中「新西国三十三ヶ所」と村落結合, 歴史地理学151, pp1-15)。
- 8) 長明寺と浄土寺で似せようとした言い伝えを確認した。空間要素の比較の詳細は文献4)参照。
- 9) お砂踏みとは、本四国から勧請した各札所の砂を一ヶ所に集めて、その上を歩かせるものである。(善龍院では毎年1/21に実施)
- 10) ツアー参加者から本四国と善龍院八十八ヶ所との間に連想関係があることを確認した。
- 11) ミニ巡礼地よりも規模が大きく、国レベルの巡礼道を持つ地域的巡礼地は、村の中の「一種の祭り」であるとされている(小嶋博巳(1987): 地方巡礼と聖地(仏教民俗学大系3), 名著出版, pp249-264)。
- 12) 近藤隆二郎・盛岡通・末石富太郎(1989): 現代都市における境界概念の意味論的考察, 環境システム研究 VOL17, pp12-17
- 13) 水分けや宮割りを含む郷経費の決算処理の場である。同時にお祭り番の順番もくじ引きで決定する。
- 14) 近藤隆二郎(1993): 前掲論文
- 15) 篠崎豊(1993): 地域環境整備の新たな視点, 月刊レジャー産業1993/6, pp154-158